

コンチェルト・アフタヌーン

ある演目をコンサートで聴くとき、その演目にあるべき情感、表現を誰もが無意識に期待するだろう。小山実稚恵は、その期待に対して奇をてらうことなく、いつの時もまっすぐに応え、そして超えてくる。

近年、ここ横浜で行われたリサイタルでも、その姿勢は実に見事であった。2020年の公演における、愛情と、その先の人ならざる存在すら感じさせたベートーヴェン。あるいは2023年公演時の信じられないほどの慈愛と深い哀愁に染まったブラームス、そして究極の機微を余すところなく表現しきったシューベルト…昨今、素晴らしいピアニストが日本にも多く登場しているが、これほどまでに聴衆の期待へ誠実に、正統に応えながら、その期待を超えた音楽をいつも聴かせてくれる彼女は、やはり別格と言わざるを得ない。

そんな彼女が贅沢に2大コンチェルトで登場するというのだから、この機会を聴き逃す手は無い。定番のニューイヤーコンサートでも小山と絶妙なアンサンブルを奏でる東京交響楽団、そして奏者からの抜群の信頼を集める指揮者・沼尻竜典という最高のパートナーたちと共に、どのような音楽を聴かせてくれるのか。期待以上の期待を持って公演を待ちたい。



©Hideki Otsuka

日本音楽界を牽引する小山実稚恵 満を持して贈る、究極の2大コンチェルト

小山実稚恵(ピアノ) *Michie Koyama, Piano*
圧倒的存在感をもつ日本を代表するピアニスト。チャイコフスキー国際コンクール、ショパン国際ピアノコンクール入賞以来、常に第一線で活躍し続けている。16年度芸術選奨文部科学大臣賞を受賞した『12年間・24回リサイタルシリーズ』(2006年～17年)や『ベートーヴェン、そして…』(2019年～21年)が、その演奏と企画性で高く評価された。2022年からはサントリーホール・シリーズ、第1シーズン Concerto〈以心伝心〉を25年まで開催している。これまで共演したオーケストラとして、国内の主要オーケストラはもとより、ベルリン響、ロイヤル・フィル、BBC響、イギリス室内管、ロッテルダム・フィル、モントリオール響、ボルティモア響などが挙げられ、フェドセーエフ、テミルカーノフ、マリナー、小澤征爾といった国際的指揮者と共演している。デュメイ、ギトリス、ブルネロといった名だたるソリストと室内楽で共演する。ショパン、チャイコフスキー、ロン＝ティボー、ミュンヘンなど、国際音楽コンクールの審査員も務める。

また東日本大震災以降は、被災地の学校や公共施設などで演奏を行い、仙台では被災地活動の一環として自ら企画立案し、ゼネラル・プロデューサーを務める『こどもの夢ひろば“ボレロ”』を開催。CDは、ソニー・ミュージックレーベルズと専属契約を結び、33枚をリリース。2023年5月にリリースされた最新CD『モノログ』まで7作連続して「レコード芸術」特選盤に選ばれる快挙を果たした。著書として『点と魂とスイートスポットを探して』をKADOKAWAより、また平野昭氏との共著『ベートーヴェンとピアノ』(全2巻)を音楽之友社より出版している。文化庁芸術祭音楽部門大賞、東燃ゼネラル音楽賞洋楽部門本賞、レコード・アカデミー賞(器楽部門『シャコンヌ』)、NHK交響楽団「有馬賞」、文化庁芸術祭音楽部門優秀賞、ミュージック・ペンクラブ音楽賞受賞。2018年度大阪市市民表彰を受ける。2017年度には、紫綬褒章を受章している。東京藝術大学、同大学院修了。吉田見知子、田村宏両氏に師事。

沼尻竜典(指揮) *Ryusuke Numajiri, Conductor*
神奈川フィル音楽監督、トウキョウ・ミタカ・フィル音楽監督。ベルリン留学中の1990年、プザンソン国際指揮者コンクールで優勝。以後、ロンドン響、モントリオール響、ベルリン・ドイツ響、ベルリン・コンツェルトハウス管、フランス放送フィル、トゥールーズ・キャピトル管、ミラノ・ジュゼッペ・ヴェルディ響、スロヴァキア・フィル、シドニー響、チャイナ・フィル等、世界各国のオーケストラに客演を重ねる。国内外で数々のポストを歴任。ドイツではリューベック歌劇場音楽総監督を務め、オペラ公演、劇場専属のリューベック・フィルとのコンサートの双方において多くの名演を残した。ケルン、ミュンヘン、ベルリン、バーゼル、シドニー等の歌劇場へも客演。16年間にわたって芸術監督を務めたびわ湖ホールでは、ミハエル・ハンペの新演出による《ニーベルングの指環》を含め、ワーグナー作曲の主要10作品をすべて指揮した。14年には横浜みなとみらいホールの委嘱でオペラ《竹取物語》を作曲・初演、国内外で再演されている。17年紫綬褒章受章。